

中学校 総合的な学習の時間における学習指導案

白浜町立白浜中学校
校 長 西田 拓大

1. 単元名

「コロナ禍を経て希薄になった地域とのつながりを取り戻そう」 ～白中夏祭りプロジェクト～

2. 単元の目標

- ・地域とのつながりを取りもどすために必要な活動とは何かを理解することができる。
- ・地域の方々の強みを生かした役割を考え、企画することができる。
- ・地域の方々と協働し、主体的に「白中夏祭り」を開催することができる。

3. 単元について

(1) 教材観

本単元では、「コロナ禍を経て希薄になった地域とのつながりを取り戻そう」をテーマに、「白中夏祭り」の企画、運営を教材として取り上げる。

本校では、昨年度から「地域の方と一緒に学校づくりを考える」として、本校教育課程を、生徒や地域の方と考える機会を持ってきた。その中で、生徒から「祭りをしたい」という発言があった。目的は、「生徒と地域の方とのつながりを取り戻す」ことだった。この意見を受け、白浜中学校コミュニティスクールの取り組みとして、生徒も含めた実行委員会を組織し進めることとなった。

この活動は、地域の方々との対話形式で進めるため、コミュニケーションスキルの向上を図ることができる。また、生徒自身が地域とつながる具体的な方法を対話を通して考えることができる。このような世代を超えた協働した取り組みから、目標とする、地域の方とのつながりを作ることができる。

(2) 生徒観

2020年のパンデミックからしばらくの間、学校では生徒に非接触を求め、地域でも人が集まる行事や祭りが取りやめになることが続いた。学校行事も同じで、入学式、卒業式、体育大会などへの入場制限や、文化発表会の取りやめなど、学校と地域がつながる場面が極端に減った。生徒は、友達など身近な存在との距離は近いが、異学年や、地域の方とのつながりは、以前に比べて弱く感じられる。

生徒会役員を中心にこのプロジェクトを進め、全校生徒が、異学年の生徒や地域の方との関わりを持ち、幅広い関係を構築できるようにしたい。

(3) 指導観

本単元の指導にあたっては、まず、何を目的に「白中夏祭り」を企画するのかを明確にし、関わる人全

員で共有する必要がある。実行委員長から、このプロジェクトが生まれた経緯を確認し、そこから、実現したい祭りの姿を描いていく。前回行った「白中コミスク球技大会」のイメージから、生徒と地域の方とのつながりを、自分たちで創っていく意欲を持たせたい。

実行委員会では、参加する地域の方が、どのような仕事を持ち、どんな得意なことがあるのかを実行委員がお互いに知る機会を持ち、その上で役割分担を決めていく。本部、屋台、縁日、ダンスなど、セクションごとにチームを作り、生徒が責任を持って進めていく体制で進める。参加生徒自身が自分の役目を明確にすることで、責任ある行動を促す。どのチームにも、複数の大人が入っているので、名前を覚えたり、地域の雑談ができる関係性を作ることができる。当日の運営自体を生徒主体で行えるよう、実行委員会での細かい打ち合わせや、シフト表作成なども行う。

また、学校の授業でも、この企画に関わる内容を取り上げる。文化部や、学年でエコバックの作成を行い、サステナブルの観点での学びとする。また、家庭科で浴衣の着付けを、体育でその浴衣を着て盆踊りを、地域の方から学ぶ授業を行う。地域での活動に、学校教育活動を組みあわせることで、より、全校生徒にとっての学びの機会とする。

さらにこの活動を振り返る機会を作り、地域の中での自分の役割を考え、地域づくりの主体者となることに気づかせたい。

（４）ESD の視点の明確化

【本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）】

構成概念Ⅰ 多様性・・・生徒・企業・公民館・保護者・教職員との協働により地域の人を知る
（いろいろなものがある、多様性に乏しい、画一的）

構成概念Ⅱ 相互性・・・いろいろな人の協働により祭りが開催できる
（つながっている、循環している、孤立しているものは何か）

構成概念Ⅲ 有限性・・・買い物袋の代わりにエコバック、ゴミ持ち帰り（ゴミ箱を設置しない）
（もったいない・物を大切に・長く使う文化、使い捨て、大量生産・大量消費・大量廃棄）

構成概念Ⅵ 責任性・・・誰が、何を、どうや役割分担をし、祭りが成り立っているのか
（協力していること、やり遂げていること、責任転嫁、やりっぱなし、言いつ放し）

【本学習を通して育てたい ESD の資質・能力】

《多面的・総合的に考える力》

何のために祭りをするのか（誰が困っているのか、祭りがないとどうなるのか）

《つながりを尊重する態度》

地域の方々と協働することで、さまざまな人とのつながりが豊かな学びになっているということを自覚し、尊重する。

《進んで参加する態度》

祭りの実行委員として活動し、貢献したいと思える

【本学習で変容を促す ESD の価値観】

「幸福感に敏感になる。幸福感を重視する。」

「世代間の公正」

地域の方とつながり学びを進めるとき、「大事にされている」と生徒が感じる場面が多い。地域のかたが一生懸命に関わってくれることや、喜んでくれることは、生徒を幸せにし、また、地域の方も幸せになる好循環を産む。そのような中で、自己効力感が生まれ、利他的な活動が生まれる。地域の大人がロールモデルとなり、自ら社会に貢献しようとする態度に繋がる価値観形成を図る。

【達成が期待される SDGs】

- 3 全ての人に健康と福祉を
- 11 住み続けられるまちづくりを
- 12 つくる責任 つかう責任



3. 評価規準

【知識・技能】	【思考・判断・表現】	【主体的に学習に取り組む態度】
①地域行事や学校行事の減少により、地域のつながりが希薄になっていることを、実際の地域の方や生徒の声を聞き理解している。 ②地域のつながりをつくるために必要な活動を理解している。	①「白中夏祭り」を、見通しを持って計画している。 ②さまざまな立場人の強みを生かした、役割分担を考えている。 ③企画を振り返り、成果と課題を明らかにしている。	①「白中夏祭り」の企画実現に向け、諦めずに取り組んでいる。 ②地域の方と協働して学びを進めている。

4. 単元の計画(総時数6時間)

時	主な学習活動と内容	◇教師の支援	◆主な評価
1	①白中コミュニティスクールにおいて、地域の課題、生徒・地域の願いを見出す。 ②実現可能なプロジェクトとして、生徒、地域、学校が協働できるものを考える。 ③「白中夏祭り」実行委員会を立ち上げる。	◇場の設定 ◇ワークショップのファシリテーター ◇「えんたくん」を用いて、言語化させる	【知識・技能】 ①地域行事や学校行事の減少により、地域のつながりが希薄になっていることを、実際の地域の方や生徒の声を聞き理解することができる。
2	「第1回実行委員会」 「白中夏祭り」の目的をはっきりさせ、その実現に向けた企画を考える。	◇目的に沿った活動になっているのか、常に確認しながら進めるよう支援	【知識・技能】 ②地域のつながりをつくるために必要な活動を理解することができる。

3 4	「第2回実行委員会」 ①具体的な活動に対して、役割分担を考える ・本部、広報、屋台、縁日、ダンス部門などそれぞれのチームで、活動の内容、準備物を整理し、計画を立てる。 ・全体で共有し、実施内容を確定させる。 決めた内容で、目的を達成できる祭りになるのか検証する。 *たこ焼きなど、食中毒の可能性がある屋台について、実施が難しいとの大人の見解。 たこ焼きなどの屋台を、地域の方と一緒に進めることが生徒の願い。	◇生徒の司会で進める ◇それぞれのチームで生徒リーダーを決め、協働してくれる大人を決める。	【思考・判断・表現】 ①「白中夏祭り」を、見通しを持って計画している。 ②さまざまな立場人の強みを生かした、役割分担を考えることができる。
	「第3回実行委員会」 ・決めた内容について、再度検討。 ・全体で実施内容の最終決定をして、各チームでの活動に入る。 *文化部、1年生でエコバックを作成し、屋台で使ってもらう。	◇生徒が本当にやりたかったことや、目的をもう一度全体で確認する。	【主体的に学習に取り組む態度】①「白中夏祭り」の企画実現に向け、諦めずに取り組むことができる。
5	「白中夏祭り」実施 それぞれのチームでローテーションを作り、実施する。 ・運営しながら、祭りを楽しめるように工夫して運営していく 地域の方と、相談しながら進めていく。	◇地域の方に任せる	【主体的に学習に取り組む態度】②地域の方と協働して学びを進めている。
6 7	全校生徒へのアンケートの実施 生徒の満足度や、変容などを確認する 実行委員長が、全校集会で祭りのまとめをする。 ・来年も祭りを実施したい ・今度は自分が実行委員として関わりたい ・地域の方とのつながりをもっと作りたい ・新しい取り組みを考えてみたい	◇アンケートをコミスクで実施 ◇アンケート結果を全校生徒に共有 ◇FIDS メソッドを用いた発表	【思考・判断・表現】 ③企画を振り返り、成果と課題を明らかにすることができる

5. 成果と課題

(1) 成果

1. 実行委員会形式での運営による学びの向上

今回の夏祭りは、白浜中学校コミュニティ・スクールのメンバーと生徒で実行委員会を組織し、企画・運営を進めた。実行委員会では何度も会議を重ね、「何のために祭りを行うのか」を多面的・総合的に考える機会を得た。この経験を通じて、《考える力》が養われた。

また、屋台や盆踊り、着付け、ダンス指導などを通じて、多くの大人と関わることができたことで、《つながりを尊重する態度》を身につける機会となった。その結果、《進んで参加する態度》も育まれ、生徒が自主的に行動し、積極的に運営に関わる場面が多く見られた。

2. 生徒の満足度と肯定的な変容

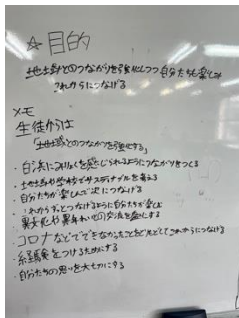
取り組みを通して、生徒全員が「楽しかった」と肯定的に評価し（資料1）、来年の実施を希望する声が多数寄せられた。さらに、地域の方々との協働を通じて、以下のような変化が見られた（資料2）。

- ・幸福感の向上：「幸福感に敏感になる」「幸福感を重視する」意識が生まれた。
- ・世代間交流の促進：地域の人と関わることで、多様なロールモデルを見つける機会となった。
- ・コミュニケーション能力の向上：他学年や地域の人と積極的に交流する様子が見られた。

3. 評価規準ごとの成果

【知識・技能】

- ・実行委員会内で生徒のヒアリングを実施し、実際の意見を反映した運営ができた。
- ・実行委員会には、学校運営協議員、公民館、商工会青年部、作業所所長、学校関係者が参加し、それぞれの役割を明確にしながら進めた。
- ・これらのことから、評価規準を満たしたと考えられる。



目標を共有



役割分担を合意形成



チームごとに活動



地元の祭りで屋台の実習



最終打ち合わせ



地元の祭りで練習

【思考・判断・表現】

- ・実行委員会で企画・役割分担を決め、生徒や保護者ボランティアを募って祭りを開催できた。
- ・祭り後には、実行委員会がアンケートフォームを作成し、振り返りを実施。
- ・第2回白中コミスクにて成果発表・決算報告を行い、次年度の改善点を考える機会を得た。



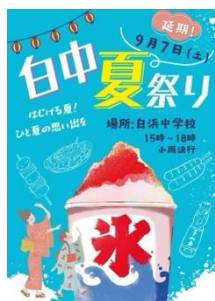
祭り開催



有志ダンス



地域の人と盆踊り



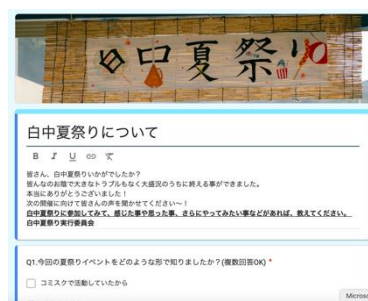
生徒作成ポスター



縁日



屋台



アンケート



実行委員長振り返り



コミスクでの振り返り



次に向けての提案発表

【主体的に学習に取り組む態度】最後までやり遂げる姿勢が見られ、協働の学びが多く見られた。



学年でエコバックづくり



有志ダンスの練習を自分たちで

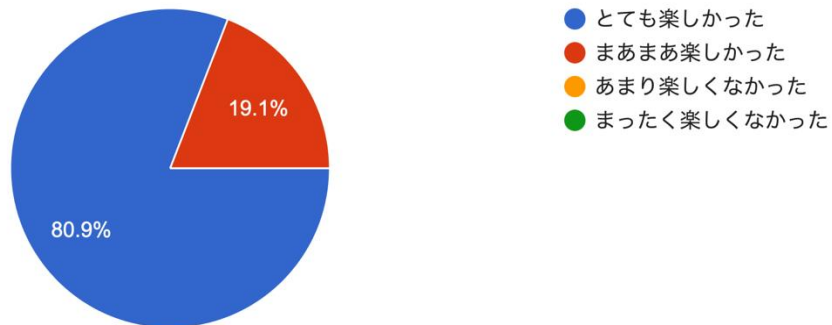


地域の方と盆踊り練習

(資料 1)

Q12.最後に今回のイベントに参加してみて

68 件の回答

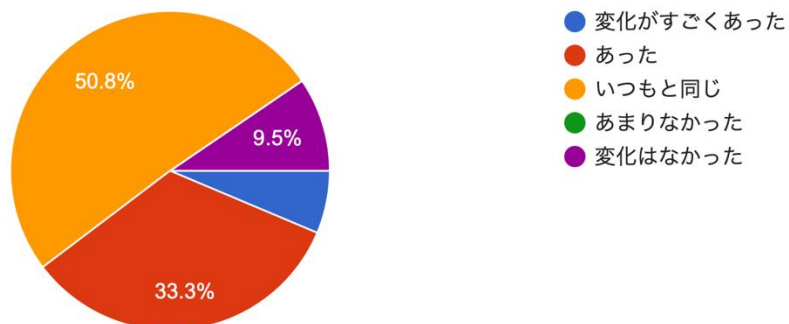


*8 割の生徒が大満足で、生徒全員が楽しかったと思える夏祭りとなった。

(資料 2)

Q6.イベントに参加してみて、自分自身に変化がありましたか？

63 件の回答



*実行委員、出演者では62.5%の人が、「変化がすごくあった」、「あった」と回答。

(資料 3) 生徒感想

- ・普段できないことを先輩や大人の人たちと楽しく遊んだり、屋台のお手伝いをしてやりがいを感じた。
- ・楽しかったし同級生や先輩後輩たちが頑張っている所がかっこいいとおもった
- ・友達との中が前より深まった 先輩と仲良くなれた気がする
- ・イベントを通して色々な人と関われた
- ・地域の人たちとの関わりができたり、接客について学べたから
- ・接客できたし、綿あめを綺麗に作れた
- ・積極性が出た 初めて学校でやったから

- ・地域の人とか友達のお母さんとかに挨拶をできた イベントに進んで参加しようとおもうようになった
- ・家のホットプレートで焼きそばを焼けるようになった
- ・屋台を他学年の人と一緒に運営したので交流ができた。
- ・コミュニケーション力 Up

(2) 課題

1. 活動が自分ごとにならなかった生徒が一部いた

夏祭りを通じて成長が見られる生徒がいる一方で、一部の生徒は、自主的な活動というより「やらなくてはいけない」感覚で取り組んでいた（資料4）。

(資料4) 生徒感想

- ・夏祭りを楽しむことはできたけど、生徒は、大人がどんどん進めていっていたから話の進み方があまり分からなかったので自分への変化はあまりなかったと思います。
- ・人を変化させるにはもっと重要な事が必要だと思うから、夏祭りだけだったらそんなに変わることはない

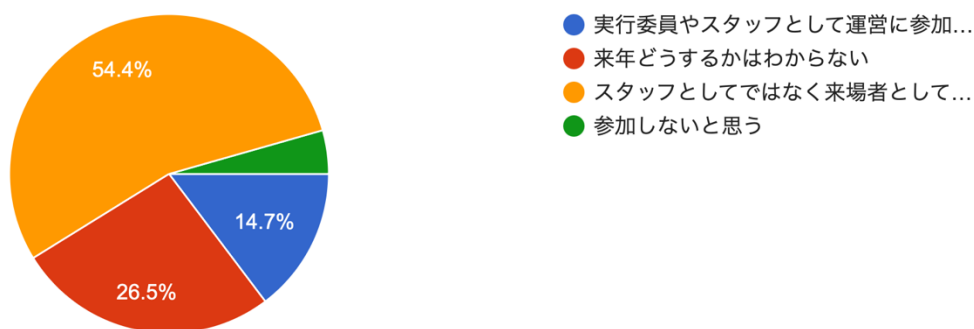
2. 参加者の「運営側として関わりたい」という意識変容につながらなかった

祭り参加者の多くはイベントを楽しんでいたが、来年は自分が運営側として関わりたいという意識までは育まれなかった。価値の自覚が難しいことが課題として挙げられる（資料5）。

(資料5)

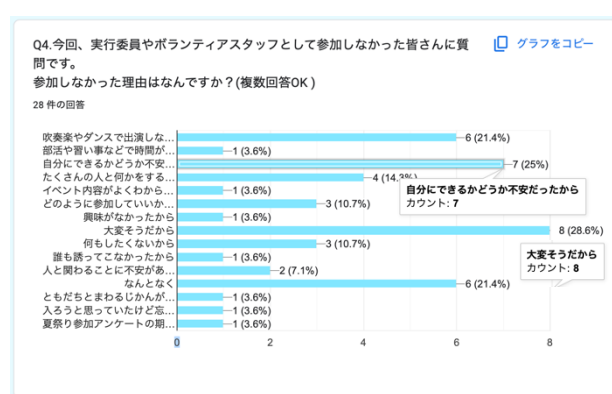
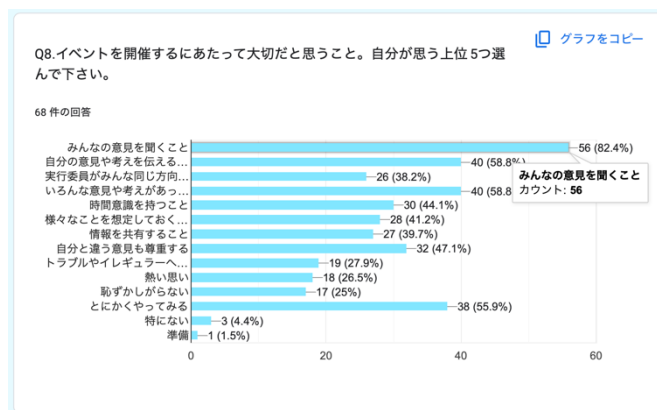
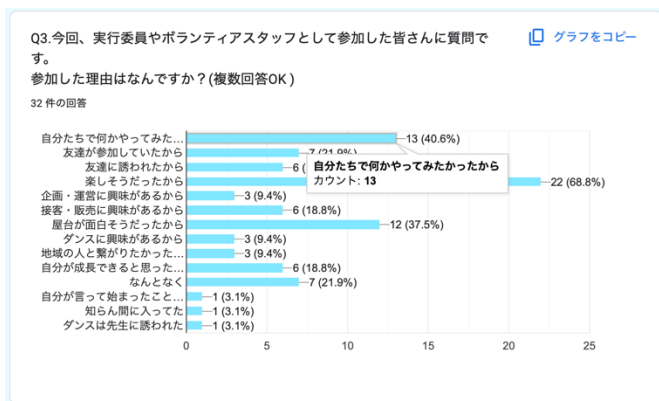
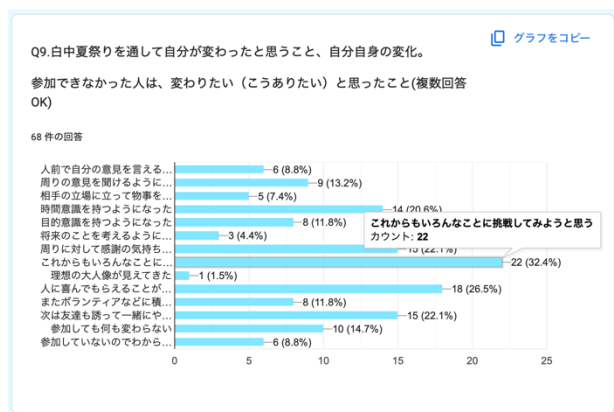
Q11.来年も開催があれば参加したいですか？

68 件の回答



* 来年参加できない3年生（全体の三分の一強）も答えているため、肯定的意見は少ない。

(3) まとめ



今回の夏祭りを通じて、生徒が一番感じたのは、「やってみたいことに挑戦する」という思いだった。地域の方々とともにそれを実現することが、生徒の社会参画や地域づくりの主体者となることにつながると感じた。また、多様な意見を聞き、合意形成を図ることの重要性を実感できたと考えられる。

また、今回の実行委員会は、生徒の立候補によって組織された。この活動を、誰もが挑戦できる場とし、「失敗を許容する文化」を醸成することが今後の課題と言える。より多くの生徒が「自分ごと」として取り組めるよう、運営側への関心を引き出す仕組みづくりが必要だと考える。

この取り組みだけでなく、生徒たちが普段から地域の方々と協働して取り組みを行うことで、文化の継承や、世代を超えたつながりを作り、自分ごととして社会とつながって欲しい。



高校も出展 本校 OB も活躍



吹奏楽部も出演



保護者会も学用品リサイクル

白中夏祭り 御礼

2年生総合の
取り組み
「白浜がちゃ」



生徒の願いを叶えるプロジェクトとして始まった「白中夏祭り」は、地域の皆様と一緒に企画運営し、生徒と地域がつながる機会となりました。夏祭りを盛況に開催できたこと、御礼申し上げます。協賛・協力・後援をいただいた皆様、ありがとうございました。

後援：白浜町・白浜町教育委員会・白浜町社会福祉協議会
協力：白浜中学校・白浜中学校育友会・白浜町商工会青年部
公民館各分館（白浜分館、羽衣分館、東白浜分館、瀬戸分館）
白浜コスモスの郷・南紀オレンジサンライズFC・白浜町社会福祉協議会
白浜婦人会・（有）永井印刷所・（有）白浜鮮魚・西川工務店
谷地商店・ひろミツバチ・甲羅館

音響協力：東宝企画・タツタトシオ

協賛：紀伊民報・WORLD PAINT・nalu hair make・阪田町内会
（株）田辺観光バス・紀伊白浜温泉土地（株）・観光開発（株）
魚彦水産・柳屋・（株）ウフル・アドベンチャーワールド・小川工業
ローソン白浜町湯崎店・（株）正紀屋・魚文・白浜FC・紬カフェ
Atelier CHOUETTE D'OR・NEW CREATE・南紀オレンジサンライズFC
白浜コスモス福祉会・（株）白浜館 ホテルシーモアキーテラス・つなぐ
（有）畠山電気商会・ケーキハウスシャモニー・kinari・Sea Birth・OS株式会社
（白浜がちゃ収益の一部を協賛）（順不同 敬称略）

白中夏祭り実行委員会（白浜中学校コミュニティスクール） 白浜町2601 Tel 42-2444



学校を開きます！ みんなが関わる地域の学校づくり

コミュニティ・学校運営協議会制度と地域学校協働活動の一体化による白浜中学校コミュニティスクール

子どもたちに求められる資質能力を社会と共有し連携しているのか（社会に開かれた教育課程）？

◎学校運営協議会

学校運営方針の承認、授業・文化発表会等の参観、学校評価の共有の年3回…

◎地域との協働

学校図書館ボランティア、民生委員さんや地域の方との会議はあるものの…

◎地域資源とのつながり

イベントとしてお願いすることが多く、継続したものになりにくい…

課題解決のためには、学校の敷居を低くすること、生徒と学校と地域が直接つながりやすくすることが必要では！

教育課程を考える会

◎第1回 令和5年10月11日

質問づくりで、優先順位の高い3つの問を全員で整理

①学習者とは誰か ②何をいつまでにやるのか

③この取り組みのゴールは何か

◎第2回 令和6年2月14日

問いに対する協議から、生徒の願いを叶えるプロジェクト

「白中コミスク球技大会」が生まれる

◎白中コミスク球技大会 令和6年3月17日開催

実行委員（生徒、学校運営協議員、スポーツ推進委員、教員有志他で運営）

この活動で、正式に会の発足を検討



白浜中学校コミュニティスクール発足

◎令和6年4月17日

学校運営協議会制度、地域学校協働活動、教職員、そこに生徒が加わり、第1回白浜中学校コミュニティスクール開催。

参加者がグループに分かれ、「やりたいこと」「できること」を自由に熟議し、「生徒が自由にやりたいことができる日」「のんびり、ゆっくり、くつろげる空間」「夏祭り」などのアイデアが出された。ここから、生徒の願いを叶えるプロジェクト第2弾、「白中夏祭り」が生まれた。



白中夏祭り

◎令和6年9月7日

プレゼンあり！

・白中夏祭りは、生徒、学校運営協議委員、公民館、商工会青年部、福祉施設、スポーツチームなど実行委員会形式で行なった。
・生徒から出た「地域とのつながり」が目的のイベント。約1000人の来場者。
・地域の方々の協力、協賛があり実現
・実行委員長の3年小森くんは、最後に地域の方に感謝の辞を述べた。

地域の方より

「来年も開催してほしい」

「地域とつながるの意味がわかった」



学校・教員の役割

1. 学校を開くという発信

元大空小学校木村校長先生の言葉に、

パブリックの学校は地域住民のもの

地域住民は「土」教職員は「風」

学校が変われば地域が変わる

地域が変われば社会が変わる

ということがあります。

「学校は地域のもの」というメッセージを強く出しています。

2. 目的・役割を考える場づくり

①対話型ワークショップの開催

年3回の学校運営協議会に加え、年2回のつながりの機会を作る。学校と関わる関係者皆さんに声掛けをする。

②学校づくりを一緒に進める

参加者全員が当事者として考えられるようにワークショップ形式で進める。

③実現可能なプロジェクトを決め、実行委員会形式で進める。その時に、参加者の役割をはっきりさせる。

④進捗状況を、メーリングリストでお知らせする。

⑤集まれる場を作る（コミスク・ラボ）

⑥日常のつながりを大切にします。

3. 教育課程との関わり

①立ち上がったプロジェクトと教科授業、総合的な学習とのつながりを考える。

②コミスクメンバーによるカリキュラムを実施（対話のフォークダンスなど）

③授業支援（英語・技術・家庭など）

④部活動見守り（職員会議の時などに助かる）

持続可能な組織に

①メンバー

・本校生徒（子供を真ん中に据える）
・学校運営協議員、地域学校協働活動推進委員（これから組織化）、地域の方（特に卒業生は、思い入れや地域とのつながりが強い）、企業の方、行政の方、別地域の方、文化施設やスポーツ関係の方、などなど、本校に関わっていただけるすべての方。

＊教職員は有志参加（働き方改革の観点）

②双方向性

・学校の依頼に地域が応えるからの脱却
・地域の意見や要望に学校が応えるからの脱却
・教員が教え、地域が支えるからの脱却

③持続可能性

・子供を支える地域の大人の出会いの場
・子供を支える地域の大人のつながりの場

④運営主体は？ みんなで考えたい！

現在の学年終了時に目指す姿

地域の方々と協働して文化の継承やつながりを作ることで、社会に日常的に自分ごととして関わる



家庭科「やってみよう 浴衣の着付け」
地域婦人会の皆さんに、浴衣の着付けを習い、地域の方との交流を持つ。また、浴衣の機能性を知り、文化に触れることで、昔ながらの文化を大切にする心を育む。

また浴衣を着てみたい。
浴衣を着て祭りに参加したい。

地域の方との雑談の中で、共通した話題があることに気づく

自分の住んでいる地区の盆踊りを踊れるようになりたい。

体育科

「白浜町の3地区盆踊りを踊れるように」
地域婦人会の皆さんに、3つの地区の盆踊りを教えてもらい、踊れるようになる。自分の地域の祭りに参加し、率先して盛り上げられる自信をつける

白中コミュニティスクール 総合

「コロナ禍を経て希薄になった地域とのつながりを取り戻そう」 白中夏祭りプロジェクト

○主に養いたい ESD の資質・能力

《多面的・総合的に考える力》

何のために祭りをするのか（誰が困っているのか、祭りがないとどうなるのか）

《つながりを尊重する態度》

地域の方々と協働することで、さまざまな人とのつながりが豊かな学びになっているということを自覚し、尊重する。

《進んで参加する態度》

祭りの実行委員として活動し、貢献したいと思える

○主に育てたい ESD の価値観

「幸福感に敏感になる。幸福感を重視する。」

「世代間の公正」

地域のかたが一生懸命に関わってくれることや、喜んでくれることは、生徒を幸せにし、また、地域の方も幸せになる好循環を産む。そのような中で、自己効力感が生まれ、利他的な活動が生まれる。

祭りといえばゴミが多く出るイメージ。少しでもゴミが出ない祭りを目標したい。

総合・文化部「エコバッグづくり」

文化部で、祭りで使うエコバックを新聞紙で制作。慣れた部員を中心に、1年生の総合の時間でも制作。ビニール袋をできるだけ使わない祭り、ゴミを出さず持ち帰る祭り、に挑戦する態度を育てる。

自分たちも、地域の一員として活躍することができる。

地域の祭りへの参加

地域の祭りに、一参加者としてではなく、運営や踊り手として参画し、地域の一員として自覚する機会とする。